

母乳栄養に関する母の意識の調査

新生児の栄養法に関する調査

研究第1部 千賀 悠子

研究第2部 窪 龍子

宮崎 叶

1. 研究目的

われわれは、第Iに母親が新生児期及び乳児期の子どもの栄養法を選ぶ場合、(1)母親をとりまく環境、(2)母親の疲労度、(3)母親の意識、(4)施設側の態度等がその選択に影響を及ぼすのではないかと考え、強力な因子は何かを知るために、第IIに当愛育病院では、新生児退院時には90%強の母乳確立率であるが、退院一カ月後の健康相談時には母乳栄養は31.2%に減少している(昭和45年調査)ので、その原因は何か、以上の目的をもって調査した。

2. 調査内容

母親の栄養法選択に影響を及ぼすと考えられる因子を、下記の4観点より設定し、調査内容を作成した。

(1) 母親をとりまく環境

- 1 対象者はどんな栄養法で育ったか
- 2 幼児期体験——少女時代、授乳又は哺乳場面に出会ったことがあるか、その時の印象
- 3 対象者の出生地と幼児期の居住地及び親の職業
- 4 教育——学校時代に育児・母乳について学んだ経験とその効果
- 5 対象者の妊娠中、分娩後の生活環境——職業、住居、家族構成
- 6 現実にもらい乳が出るか否か
- 7 産科異常の有無
- 8 小児科異常の有無

(2) 母親の疲労度

- 1 主観的疲労度—妊娠後期、分娩後の生活期間
- 2 家事労働の負担—協力者の有無、生児数の有無

(3) 母親の意識

- 1 生まれてくる子どもに対する栄養法の希望
- 2 栄養に関する知識の情報源
- 3 母乳が過不足した場合どうするか
- 4 各栄養法にどんなイメージをもっているか
- 5 母乳を出すための努力をしているか—乳房・乳首のマッサージの実行など
- 6 母乳バンクに対する考え方
- 7 次の子どもはどんな栄養法で育てるか

—観察—

- 1 哺乳の上手、下手
- 2 授乳時の対象者の態度

(4) 施設側の態度

- 1 乳房・乳首の状態が授乳に適しているかどうかのアドバイス等の有無
- 2 母乳など児の栄養法についての知識の教育及び指導の有無
- 3 入院中の新生児の栄養法について施設側から説明等を受けたか

以上について、60項目からなる調査用紙を作成した。

3. 研究方法

調査方法：

- (1) 3回に分けて対象者にインタビューを行なった。
第1回(妊娠9～10カ月頃)は母親学級または産科外来で
第2回(分娩後5～6日目)は病室で
第3回(分娩後1カ月頃)は保健指導部で
(2) 新生児室での授乳時の観察は新生児勤務者が行なった

(3) 母乳と人工乳に対するイメージ調査は第1回時に
行なった かった。

調査期間： 1975年8月～1976年2月
調査対象者： 愛育病院で出産予定の妊婦50名

第2表 母親の生まれた所と生後一年間育った所、及
び生まれた施設

4. 調査結果

対象者である母親がどのような栄養法をとったかについて、在院中の栄養法をa群(母乳の直接授乳)、b群(母乳の直接授乳、搾乳)、c群(母乳の直接授乳、搾乳、もらい乳)の3群に、出生後1カ月間の栄養法を、母乳群(母乳栄養のみ)、混合群(1カ月間に多少とも人工乳が加えられた)の2群に各々分けた。各群の分布を第1表に示す。なお、出生後1カ月時に人工乳だけを与えられている児はなかった。

群		a	b	c	計	母乳	混合
生まれた所	市部	14	6	15	35	16	18
	郡部	7	4	2	13	7	6
	その他	0	0	2	2	1	0
一年間育った所	市部	15	6	15	36	17	12
	郡部	6	4	2	12	6	12
	その他	0	0	2	2	1	0
	不明	0	0	0	0	0	0
生まれた施設	国公立病院	2	1	4	7	3	4
	個人病院	2	2	6	10	5	4
	個人産科医院	0	0	0	0	0	0
	助産所	0	0	0	0	0	0
	自宅	16	7	9	32	16	15
	その他	1	0	0	1	0	1

第1表

1カ月後の栄養		退院時の栄養法		
		a群(21)	b群(10)	c群(19)
母乳	24例	11	6	7
混合	24例	9	4	11
不明	2例	1	0	1

(1) 母親をとりまく環境

母親をとりまく環境についての調査結果を第2～16表に示す。各項目について χ^2 検定を行なったが、多くの項目において有意なる差は見い出せなかった。

観察による「乳房の形と乳頭の状態が母乳の直接授乳に及ぼす影響」(第15表)を考察した結果、在院中は乳房の形と乳頭の状態が母乳の直接授乳の難易に影響を与えていたが ($\chi^2=7.68$ $\chi^2.975(2)=7.38$ $P<0.025$) 退院後1カ月間の栄養法には、乳房の形、乳頭の状態の影響はみられなかった。

少女時代、母乳の授乳場面に会った時に「あこがれる」な感情をもったものは、母乳に対して受容的な感情を育ぐくんでいるのではないかと予測したが、母乳授乳場面に「何も感じなかった」という、つまり母乳の授乳を当然のこととして受けとめたものの方が、自らが母乳を与えることに抵抗を感じていなかった。ただし、この点に関しては有意差はなかった(第4表)。

その他の母乳をとりまく環境(母親の生れた所と育った所、学校時代に母乳について学んだか否か、その有効性、本人と夫の年令・教育、夫の職業、家族構成、出産後1カ月すぎた住居の環境、出産経験の有無、産科・小児科異常の有無)については、各群の間に全く差はな

第3表 母親の育った栄養法

群	a	b	c	計	母乳	混合
母乳	15	8	11	34	16	16
もらい乳	2	1	0	3	2	1
人工乳	1	0	3	4	0	4
混合乳	3	2	4	9	6	3
不明	2	0	1	3	2	0

注) 重複回答あり

第4表 少女時代母乳の授乳場面に会った時の印象
(分娩前に調査)

群	a	b	c	計
その時の印象				
○あこがれる	0	1	1	2
○拒否的	2	0	0	2
○何も感じない	6	4	3	13
○その他	6	4	7	17
計	14	9	11	34

注) その他の意見抜粋

- はづかしい 2例
- あたり前、普通 2例
- ほほえましい 2例
- 可愛い 5例

窪他：母乳栄養に関する母の意識の調査

第5表 少女時代、人工乳を哺乳している場面に出会った時の印象（分娩前に調査）

群 その時の印象	本 人			計	夫
	a	b	c		
あこがれ	0	0	0	0	0
拒否的	0	0	0	0	0
何も感じない	2	0	4	6	6
その他	1	1	1	3	3
	(ミルクを自分でも飲みたかった)		(可愛い)	(ふつう)	
計(出会った者)	3	1	5	9	

第6表 学校時代、母乳について学んだことが、現在役立っているか、否か。（分娩前に調査）

群	a	b	c	計	(母乳)(混合)	
	学んだことなし	15	6	10	31	14
学んだことあり	6	4	9	19	10	8
中学校で	(2)	(0)	(4)	(6)	(1)	(4)
高校で	(4)	(1)	(5)	(10)	(6)	(4)
大学で	(1)	(3)	(1)	(5)	(4)	(2)
学んだことは						
役立っている	3	1	3	7	4	3
役立っていない	0	0	0	0	0	0
不明	3	3	6	12	6	5

注) 重複回答あり

第7表 本人と夫の年齢

年 齢	本 人			計	夫
	a	b	c		
20～24	2	0	4	6	0
25～29	12	8	9	29	24
30～34	6	1	3	10	15
35～39	1	1	3	5	7
40以上	0	0	0	0	4

第8表 本人と夫の教育

群	本 人				夫	
	a	b	c	計	母乳	混合
中学卒	1	0	0	1	1	0
高校卒	11	3	6	20	10	8
短大卒	5	3	7	15	6	9
大学卒	4	4	6	14	7	7
大学院卒	0	0	0	0	0	0
不明	0	0	0	0	0	0

第9表 本人及び夫の職業

職業	本 人		夫
	本人	夫	
営業社員	0	4	
会社公務員	2	39	
自由業	1	1	
その他	0	3	
不明	2	3	
なし	45	0	

第10表 分娩後の家族構成

家族数	例数	内 訳
3人	21	夫婦と第一子 → 21例
4人	14	夫婦と子ども(子ども2人～4人) → 15例
5人	6	夫婦と夫の父母と子ども → 6例
6人	2	夫婦と妻の母と子ども → 1例
不明	7	

第11表 出産後一カ月を主に過ごした家と家族1人当りの部屋数

群	a	b	c	計	母乳	混合
	退院以来ずっと自宅	10	3	11	24	11
退院後実家へ、その後自宅	5	3	1	9	3	6
退院以来ずっと実家	4	3	4	11	7	4
その他	1	1	2	4	2	2
不明	1	0	1	2	1	0
1人当り, 1部屋未満	10	3	11	24	13	11
" 1部屋	3	3	3	9	3	6
" 2部屋未満	5	4	3	12	6	6
" 2部屋以上	2	0	0	2	1	1
不明	1	0	2	3	1	0

第12表 住居のまわりの騒音と住み心地
(出産後1ヵ月過ごした家)

		母乳	混合	計
静か 隣の物音が…… 自動車…… その他……		18	18	36
		1	0	1
		4	4	8
		1	2	3
住み心地良い 普通 悪い		14	14	28
		8	6	14
		2	4	6

第13表 出産の経験の有無

群	a	b	c	計
初産	12	8	9	29
経産	9	2	10	21

第14表 産科異常の有無

		a	b	c	計
妊娠中	貧血	10	3	7	20
	中毒症	5	1	4	10
	その他	1	1	1	3
	産科異常	3	4	7	14
分娩時	帝王切開	1	0	1	2
	吸引	0	1	1	2

注) このうち授乳が全くできなかったものはなかった

第15表 観察による、乳房の形と乳頭の状態

群	a	b	c	計	母乳	混合
乳房の授乳に不適	2	1	3	6	4	1
〃 + 乳頭扁平	0	0	1	1	1	0
〃 + 乳頭過大	1	0	0	1	1	0
〃 + 乳頭過小	0	0	1	1	0	1
乳頭扁平	1	3	2	6	1	5
〃 + かんぼつ	0	0	0	0	0	0
〃 + 過小	0	1	0	1	0	1
〃 + 過大	0	1	0	1	1	0
乳頭過大	0	1	1*	2	2	0
異常なし	17	3	11	31	14	16

注) *印のみ経産婦, 他は全例初産婦

第16表 新生児の異常

群	a	b	c	計
	1	2	2	4
異常内容	(心雑音)	(頭血腫)	(仮死+重症肺炎, 突発性高ビ)	

注) 本表のうち, 在院中に児が母乳を全く吸うことのできなかったものは, 1例もない。

(2) 母親の疲労度

結果を第17~18表に示す。妊娠後期, 分娩後の生活期間において本人が自覚している疲労度(主観的疲労度)は, 各群の間に有意差はなかった。

分娩後の生活期間に家事の協力者があったかどうかについてみると, 協力者のあったもの27例(母乳群16例, 混合群13例)協力者なしは21例(母乳群8例, 混合群13例)で, やや母乳群に協力者を得たものが多い(有意差なし)。

第17表 妊娠末期の母親の疲労度と家事分担

群	a	b	c	計
大変疲れる	1	0	0	1
時々疲れたと思う	9	2	10	21
あまり疲れない	2	4	4	10
ほとんど疲れを知らない	9	4	5	18
その他	0	0	0	0
他の家族が全部行なう	3	1	1	5
他の家族が中心になり, 自分は手伝う	2	1	2	5
各自がそれぞれ分担している	2	1	3	6
自分が中心に行ない, 他の家族が手伝う	1	1	1	3
自分が全部行なう	13	6	12	31

第18表 出産1ヵ月後の母親の疲労度と家事分担

群	母乳	混合	計
大変疲れる	1	5	6
時々疲れたと思う	14	12	26
あまり疲れない	4	1	5
ほとんど疲れを知らない	4	4	8
不明	1	2	3
他の家族が全部行なう	1	4	5
他の家族が中心になり, 自分は手伝う	11	3	14

窪他：母乳栄養に関する母の意識の調査

各自がそれぞれ分担している	2	0	2
自分が中心に行ない、家族が手伝う	2	4	6
自分が全部行なう	8	13	21

(3) 母親の母乳に対する意識と行動

結果を第19～31表に示す。生まれてくる子どもの栄養法の希望は、「仕事を持っているので」、「自宅と実家間を往復する都合があるので」という理由をのべた2例を除き、48例の母親が母乳で育てたいと希望していた。また、夫が希望する栄養法は、36例が母乳で、14例のものは、特に児の栄養法に関しての意見を持っていなかった。

母乳栄養を続ける期間を、ほとんどの母親が離乳開始の時期よりも長く望んでいた。

母乳を与える理由として「免疫、抗アレルギー、抵抗力、安全、栄養等の点ですぐれている」ことをあげたものの38%に対し、「母子の愛情が育つ」という精神主義的理由をあげたものは10%であった。

第19-1表 分娩前の栄養法の希望及びその期間

群		a	b	c	計
母親	母乳で育てたい	20	10	18	48
	混合で育てたい	0	0	1※	1
	人工乳で育てたい	1※	0	0	1
父親	母乳で育てたい	17	9	10	36
	意見なし	4	1	9	14

注) ※印「自宅と実家を行き来するため」「仕事があるので」の理由による。

第19-2表

母乳を続けたいと思う期間	a	b	c	計	母乳	混合
1 カ月迄	0	0	0	0	0	0
2 カ月迄	1	0	0	1	0	1
3 カ月迄	2	4	4	10	5	4
離乳開始迄	4	1	1	6	1	5
それ以上	13	5	13	31	18	12
不明	1	0	1	2	0	2

第20表 母親が母乳を希望した理由

理由	a	b	c	計	母乳	混合
免疫アレルギーですぐれている	13	7	14	34	17	17

一般にすぐれている	6	4	7	17	9	8
愛情が育つ	3	3	3	9	4	5
経済的	2	1	5	8	2	6
便利	1	2	4	7	3	4
自然だから	2	1	4	7	3	1
母体によい	0	1	3	4	2	2
その他	2	2	0	4	1	3

注) 重複回答あり

第21表 人工乳に対する関心(分娩前に調査)

群	a	b	c	計	母乳	混合
人工乳が牛乳から、出ていることを知っている	13	7	15	35	17	16
知らなかった	7	3	4	14	6	8
不明	1	0	0	1	1	0
人工乳を新生児に与えることに抵抗はない	8	8	12	28	9	18
抵抗がある	13	2	7	22	15	6

第22表 分娩前、母親は栄養に関する情報を、どこから入手しているか

群	a	b	c	計
テレビ新聞などで	8	5	12	25
本で	7	3	6	16
母親学級で	3	2	7	12
産科医、助産婦、小児科医の助言	2	0	2	4
保健所で	1	0	0	1
その他(実母、姉、友人等からきく)	3	0	2	5

注) 重複回答あり

第23表 母乳が不足したらどうするか(分娩前の調査)

群	a	b	c	計
人工乳を足す	21	10	19	50※
もらい乳をする	0	0	0	0

注) ※印 このうち、もらい乳を考えたことのあるもの8例、現実的に可能であれば、もらい乳してもよいと考えるもの。

第24表 母乳が不足した場合、人工乳を足すとする理由（分娩前調査）

	a	b	c	計	母乳	混合
他人の乳はイヤ	8	5	6	19	8	11
もらい乳は現実的に無理	2	1	5	8	4	4

第27表 人工乳の買おき

	母乳	混合	計
必要になる前から準備した	10	6	16
必要時に購入した	0	18	18
購入していない	14	0	14

第25表 母乳が余った場合どうするか（分娩前に調査）

	a	b	c	計	母乳	混合
不足している人にあげる	5	2	3	10		
搾乳で 直接授乳で どちらでも相手次第 不明	(2)	(0)	(2)	(4)		
	(3)	(1)	(0)	(4)		
	(0)	(0)	(1)	(1)		
	(0)	(1)	(0)	(1)		
捨てる（他人にはあげない）	8	5	11	24		
考えていない、わからない	2	3	2	7		
余るとは考えない	3	0	0	3		
あとで自分の子にシステムが備わればあげてもよい	1	0	0	1		
不明	2	0	1	3		
	0	0	2	2		

第28表 母乳をよく出す為の準備（分娩前に調査）

群	a	b	c	計	母乳	混合
自分で乳房や乳首を調べた	6	2	4	12	5	6
調べない	15	8	15	38	19	18
乳房、乳首のマッサージなどの手当をしている	17	7	13	37	20	15
していない	4	3	6	13	4	9
その他母乳が出るように工夫している	5	1	5	11	5	5
していない	16	9	14	39	19	19

第29表 授乳時の母親の印象（在院中に調査）

	a	b	c	計	母乳	混合
幸せな安らかな気持	9	3	8	20	10	9
責任を感じる	4	2	3	9	4	5
十分に飲んでくれることを主に考える	6	3	6	15	6	9
重労働であると思う	0	1	0	1	0	1
何も感じない	1	0	1	2	0	2
その他	5	4	4	13	6	6

注) 重複回答あり

第26表 母乳バンクに対する関心（出産後1カ月に調査）

	a	b	c	計	母乳	混合
母乳バンクを知っている	8	3	6	17	9	8
知らない	12	7	12	31	15	16
母乳バンクのシステムが整ったら						
是非利用したい	0	0	3	3	0	2
できれば利用したい	2	0	2	4	1	4
よければ利用したい	5	3	5	13	6	7
できれば利用したくない	5	3	6	14	8	6
絶対に利用したくない	3	0	0	3	3	2
わからない	5	4	2	11	6	3

第30表 新生児室の勤務者が観た、母親の授乳の仕方

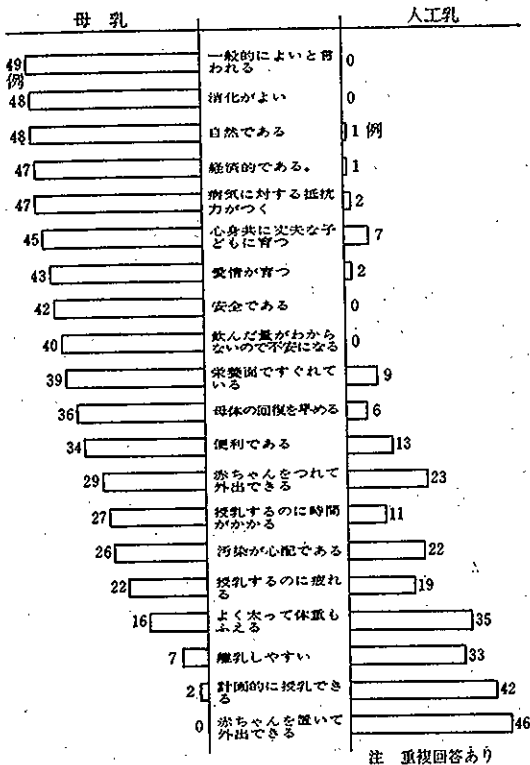
群	a	b	c	計
とても上手に熱心に与えている	7	1	5	13
まだ慣れないが、熱心に努力している	13	8	13	34
慣れているが、子どもに対して話しかけは少ない	1	0	1	2
ぎこちなく、子どもをもてあましている	0	0	0	0
なげやりである	0	0	0	0
その他	0	1	0	1

第31表 新生児室の勤務者が観た、新生児の母乳の吸い方

群	a	b	c	計
力強く吸っている	17	3	11	31
どうか吸っている	1	2	5	8
すぐに眠ってしまう	0	0	0	0
乳首を口に入れても吸わない	1	0	0	1
吸い方にムラがある	1	1	0	2
その他	2	6	5	13

注) 重複回答あり

第1図 母乳と人工乳に対するイメージ



母乳と人工乳に対するイメージ調査の結果は(第1図)各群とも類似したイメージを示していて、差はみられなかった。

栄養法に関する知識、情報は、テレビ、新聞、書籍などのマスコミュニケーションや母親学級における集団教育の場で得ることが多く、産婦人科医、小児科医、助産婦などから個別的な指導を受けることは少ない。また保健所の指導なども希薄であった。

母乳が不足した場合どうするかについては、全例が人工乳を補うとし、もらい乳をすると希望したものは皆無であった。

もらい乳は都市生活において現実的に不可能ではあるが、もらい乳に関しての可能性を問題にしたものは少なく、「他人の乳はいやだ」という感情面での拒否反応が38%あった。

反対に自分の母乳が余った場合、他人にあげてもよいとするものは20%あった。ただし、以上のいずれについても各群の間に有意差はみられなかった。

母乳バンクについて知っているものと知らないものの割合は3:7であったが、バンクのシステムが整い発足した場合、バンクを利用してもよいとするものと利用しないものの比は4:6で、利用の希望をもっているものの方が少なかった。しかし、退院後の栄養法別にみると、混合群が母乳群よりもバンクの利用を希望しているものがやや多かった(有意差なし)。だが、全般的に言えることだが母乳バンクの使命を理解していないように思われた。

母乳が出ない場合を考えての人工乳の買い置き、母乳を出すための工夫、看護婦の観察による母親の授乳の仕方や、新生児の母乳の扱い方、授乳時の母親の児への接し方等、集団授乳に対する母親の意見、次子の栄養法に対する希望については、各群の間に有意差はみられなかった。

人工乳が牛乳からつくられていることを70%のものが知っているが、その人工乳を新生児に与えることに抵抗があるかどうかをみると、在院中母乳のあまりよく出なかったものと、退院後の児の栄養に混合栄養を選んでいるものは、人工乳を与えることに抵抗感をもっていないことがわかった。(χ²=6.80 χ².95(1)=3.84 P<0.05)

(4) 施設側の態度

第32~35表に示すように、母乳がよく出るような指導を受けたものは24例であった。

当院は母児別室制をとっているので、授乳室にて1日7回の授乳がおこなわれる。このことに関しては、「楽しく授乳できる」、「他の人の状態がよくわかる」と集団授乳を受けいれている。母乳分泌のよくないb、c群の対象者も、他の人の母乳分泌を気にすることなく集団授乳を良しとしている。

第32表 新生児室での集団授乳に対する母親の意見

	a	b	c	計
よいと思う	14	8	14	36
母子別室で一人で授乳したい	0	0	0	0
別にどうということもない	5	0	4	9
母子同室で一人で授乳したい	0	0	1	1
その他	3	2	1	6
	○時間にしばられ、あせる	○個室なのでわからない		
	○時間通りにするのがかわいそう	○個室なので設備がせまい		
	○ナン			
理由				
皆と一緒に楽しく授乳できる	7	3	4	14
他の人の状態もわかってよい	10	6	8	24
他の人のことが気になって落ち着かない	0	0	0	0
その他	2	1	1	4
	新生児室に行くのがつらい	経験がきけるので安心する	赤ちゃんのリズムにあわせたい	

注) 重複回答あり

第33表 母乳がよく出るように指導を受けたか

群	a	b	c	計	母乳	混合
受けた	9	7	8	24	12	12
{ 保健所で 病院で 母親学級で その他	(1)	(1)	(0)	(2)		
	(0)	(0)	(0)	(0)		
	(4)	(5)	(6)	(15)		
	(2)	(0)	(0)	(2)		
不明	(2)	(2)	(2)	(6)	12	12
受けない	12	3	11	26		

注) 重複回答あり

第34表 乳房、乳首の診断の有無

群	a	b	c	計	母乳	混合
なし	20	8	15	43	20	21
あり	1	2	4	7	4	3

注) 診断のあったものはすべて経産婦で、前回、児を出産した時に診断された。

第35表 在院中の3時間おき1日7回の授乳についてどう思うか

	a	b	c	計	母乳	混合
回数を増したい	0	0	0	0	0	0
丁度よい	11	6	14	21	16	14
回数を減らしたい	5	4	5	14	5	9
その他	5	0	0	5	3	1

注) その他の意見抜粋

- 赤ちゃんのリズムにあわないと思う 3例
- 授乳におわれて多忙 1例
- 時間通りで、赤ちゃんがかわいそう 1例

4. 結 論

今回の調査においては、母親が児の栄養法を選ぶ場合その選択に影響を及ぼす因子について考察した。

(1)妊娠中には、対象者の48例のものが免疫・アレルギー・抵抗力・安全・栄養等の理由により母乳栄養を希望していた。

(2)在院中の児の栄養法は全例母乳栄養で、授乳状態は直接授乳21例、直接授乳+搾乳 10例、搾乳+もらい乳19例であった。

(3)退院してからの1カ月間の栄養法は、母乳24例(母乳群)、混合24例(混合群)、不明2例であった。

(4)在院中、乳房・乳頭の状態の良好でないものは、母乳の直接授乳は困難であったが、その後の状態が良好になったものもあり、退院後1カ月間の栄養法には、影響はみられなかった。

(5)混合群24例の人工乳補填の主な理由は、母乳不足気味と思う14例(58.3%)であるが、人工乳補填に際して病院、専門家に相談した例はなく、母親の独断によって補填している。

(6)栄養法に関する知識及び意識についてみると「母乳は免疫、抗アレルギー等ですぐれている」と70%のものが母乳の効用をあげているが、一方母乳不足を補う事に関しては「他人の乳(もらい乳)はイヤ」だとするものが38%あり、母乳であっても「他人」に対する拒否感が

窪他：母乳栄養に関する母の意識の調査

ある。又、人工乳に対する抵抗感をみると、退院後の栄養法が母乳群であったものの方が混合群に比し有意に人工乳に対し抵抗感をもっていた。

(7)人工乳の買置きが母乳群に41.7%あった。なお退院後母乳栄養の確立が推測されたのは37例であるが、現実には母乳栄養は24例であり、混合に移行した13例の人工乳補填理由を分析すると、母親の勤務、外出の為2例、多忙2例、母乳不足気味と思う9例。なお母乳不足気味と思う9例中5例は在院中の母乳分泌は良好であった。

沢田・羽室¹⁾らの研究においては混合栄養になるきっかけは「赤ちゃんの泣き」という現象で、その背景には母乳分泌に対する不安と疲労があると報告している。今回の調査においても、退院後家事の協力者のいないものが2例あり、協力者のいないことは母親の疲労もさることながら、育児等に関して気軽に相談する相手がいないことを意味し、母親達は母乳不足に対する不安を抱きながら産褥期の生活を過していることが推察される。

母親達は通念としての母乳の効用は知っているが、不都合な状態になれば母乳に替りうるものとして人工乳を補い。栄養法選択に現代人の多元的思考形態の一端が伺え、母乳に対するカリスマ的信仰は薄れている。母乳不

足に対する不安、哺乳量が解らないといった現状をふまえ、母乳栄養及び授乳指導が十全に行われるよう吟味することが必要である。

文 献

- 1) 沢田啓司，他：はじめて人工乳を与える時の母親の判断について，日本総合愛育研究所業績抄録集 昭和51年4月
- 2) 厚生省児童家庭局母子衛生課：昭和45年乳幼児身体発育調査結果報告書，30，1971
- 3) 高野 陽，他：育児に関する調査，小児保健研究29(6)，208～217，1970
- 4) 高野 陽，他：大都會の母親の育児態度に関する研究，日本総合愛育研究所紀要第6集，85～101，1970.
- 5) 内藤寿七郎：乳児栄養，小児科診療34(6)，1～6，1971
- 6) 山内逸郎：新生児の母乳栄養，小児科臨床27(2)，5～14，1974
- 7) 松島富之助：母乳栄養の減少傾向とその背景に対する文献的考察，日本総合愛育研究所紀要7集，30～40，1971